

ラスダシャン周辺紀行

— 庄 武 孝 義 —

◆ラスダシャン

ラスダシャン (4533メートル) はアフリカ第4の高峰で、エチオピアを代表する高山である。しかし私の知る限り 2004年時点ではこの山の観光絵葉書を見たことがない。アプローチが難しく作られていないのだろう。日本ナイル・エチオピア学会の人もほとんどその山容 (写真①参照) を見たことがないのではないだろうか。ラスダシャンはセミエン山岳地帯の奥にあり、周囲から見えないからである。

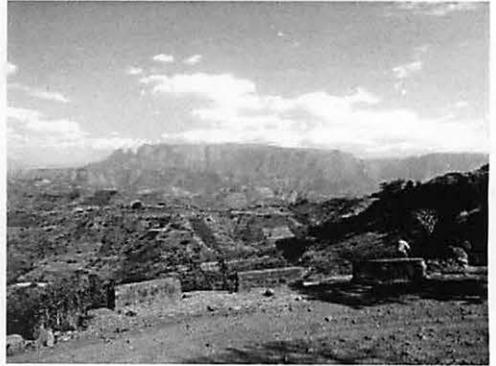
デバルクからアクスムへ通ずるイタリアが造った道でレマリモ (写真②参照) と呼ばれる急勾配を



写真① 北から見たラスダシャン (ヴァフイート南山麓から見たラスダシャン。白いのは雪ではなく積もった雹)



写真② レマリモ (イタリアが造ったデバルクからアクスムへ通ずる急勾配の道)



写真③ セミエン国立公園、ギーチ台地 (アディアルカイ近郊から見た世界遺産の主要部、ギーチ台地とサンカバ [右端])



写真④ エミトゴッコから東方を望む (はるか彼方に4峰が見える。右手前の高峰はヴァフイート [4430メートル]。4峰の少し左手前は、セミエン山岳地帯の中心の山キディスヤード [4453メートル]。この山から四方に流れができて、全て最後はタカゼ川に合流する)

北へ1800メートルほど下った低地に、モスレムの町アディアルカイがある。この近辺から見える山塊は、国立公園になっている山塊の北辺に位置するギーチ台地である (写真③参照)。この台地の北東端のイミトゴッコ (3926メートル) に立つと、はるか東方に四つの高峰が見える。左から、ウェノバー、テフィウレッサ、アナル (どれも4400メートルを超える)、そして一番右端がラスダシャンである (写真④参照)。ちなみに世界自然遺産に指定さ

れているのは、国立公園となっているギーチ台地と台地を形づくっている崖の部分だけである。

◆高地を縦断する道

最近、自然破壊に対する猛反対を押し切り、UNDP の援助で国立公園を東西に縦断して、デバルクからヴァフィート（英語で in front of「ラスダシヤンの前」と言う意味：4430 メートル）のすぐ南を峠（海拔 4300 メートル。おそらくエチオピアで車の通行出来る最高所）にして生活道が完成、次の台地を 30 キロメートルほど南に下ったデレスゲ（メカネベルハン）の町まで自動車で行けるようになった。デレスゲはデバルクからは大きな谷を挟んで南東 40 キロメートルの所にある。この道路はデレスゲの住民が近辺の幾つもの台地で出来る大麦をデバルクの町まで運ぶために造られた。それまではロバで深さ 2000 メートルの谷を上り降りしてデバルクに行くか、台地の道を 80 キロメートルから 100 キロメートル歩くかであった。2004 年には、



写真⑤ メシェハ谿谷



写真⑥ セミエン山岳地帯全貌（アスマラからアディスアベバへ飛んだ時の航空写真。メケレ西方上空 8000 メートルから。一番手前がハイ台地）



写真⑦ ハイ台地（ラスダシヤン北山麓から見たハイ台地。最高地点は 4100 メートル）

これまでもエチオピアのいたる所で見かけたいすゞの小型トラックが、この道でも人々を零れ落とさんばかりに満載して運んでいるのを見かけた。

◆ゲラダヒヒの天国

ヴァフィートの峠まで上ると、東にラスダシヤンの山容がメシェハ谿谷（写真⑤参照）を挟んで忽然と現れる。しかしラスダシヤンの頂上まではここから徒歩でまる 3 日かかる。私は 1993 年デバルクから 6 日かけて登頂した。上述した四つのピークを繋ぐ尾根はいずれも 4300 メートルを超え、それぞれ 200～300 メートルの垂直の崖を伴い、そこにゲラダヒヒの sleeping site があることを見出した。ここで、ゲラダヒヒが最高所に適応した霊長類であると確信した。ラスダシヤン山頂の裏側は台地で、この山岳地帯最大のテーブル・ロックになっている（写真⑥参照）。

この台地は最近使えるようになった「google earth 3D ソフト」で見ても一目瞭然である。南側からもラスダシヤンの頂上は見えるが、ちょっとした丘のようにしか見えない。この台地は南へ行くに従って次第に高度を下げてゆき、2, 30 キロメートルで 3000 メートルまで下がり、そこで一気に崖となって落ち込んでいる。この台地の北半分は 4000 メートルを超えているので耕作できないが、南半分の 3700 メートル以下の所では大麦が栽培され、小さな集落が点在している。クリスチヤンの村が多く、地図にはこの辺からラリベラまで 11 日の道のりと記されている。おそらく巡礼の道ではないかと想像した。

上述したエチオピア最大のテーブル・ロックの東側、深さ 2500 メートルの谷を挟んだ所にも小



写真⑧ ギーチ台地のゲラダヒヒ



写真⑨ ギルベナー村の大きなフィグの木

さなテーブル・ロックがある(写真⑦参照)。高さは最高地点が 4000 メートルを少し超す程度であるが、低いところでも 3600 メートルある。農家が 1 軒だけあり大麦を栽培している。大半が森林限界を超えているので、ヒースの木もほとんどなく、崖に近いところは草原で、中央部はロベリアの樹木に覆われている。人々はこの台地をハイとよんでいる。地名の意味は解らない。そんなに広くない台地だから 1 日あれば崖沿いに 1 周できる。回ってみて驚いた。崖沿いにはこれまでに見たこともない多数のゲラダヒヒが生息していた。ラスダシャン周辺にもゲラダヒヒが多かったが、密度で見るとこちらの方が大である。1993 年の調査で確認されたラスダシャン周辺のゲラダヒヒの多さから、その辺をゲラダヒヒの楽園と名づけていたが、95 年末のハイでの調査からセミエン山岳地帯の一番東奥にあるハイ台地がゲラダヒヒの最高の楽園と思うようになった。91 年から始められたこの地域のゲラダヒヒの分布と個体数調査では、2004 年までに東西 80 キロメートル、南北 70 キロメートルの約 5 万平方キロメートルに 5 万頭以上生息していると推定できた。また DNA 検索でも遺伝的変異性が高く、大繁殖集団を形成していると推

察できた。まさにセミエン山岳地帯はゲラダヒヒの天国である(写真⑧参照)。

また幾つも削られた深い谷には、ところどころジュニペラスやヒースの林が残っていて、セミエンホックス、ヒョウ、カラカル、ハイエナ、などの肉食動物、ワリアアイベックスやクリプトスプリガーなどの草食動物、ラマガイヤーなどの猛禽類、突然現れるマントヒヒ、アヌビスヒヒなど動物分布に関してもハイ台地は未知で非常に興味ある地である。

このハイ台地へは北の谷底(海拔 2000 メートル)にあるクリスチヤンの大きな村ギルベナーから 1 日出かけて登った。

◆宗教が混在するセミエン山岳地帯

ギルベナー村の中央には大きなフィグの木があり、直径が 70 メートルから 80 メートルの日陰をつくっていて(写真⑨参照)、村人が三々五々休んでいたり、談笑をしている。時には集会も開いている。また大きな教会が森(ユーカリも少しあるが、ほとんどオリーブやジュニペラス)で覆われていて、古い歴史が感ぜられた。小中学校もあり、いろいろな地方から先生が赴任してきていた。先生たちは、ここに来るには先に述べた北の低地にあるモスレムの町、アディアルカイから 4 日かけて歩いて来なければならないと嘆いていた。私は山岳地帯を上り下りして来ているので、デバルクから 10 日を要した。ギルベナー村に入る前の日は小さなモスレムの村バランパイエに泊ったが、その村の山向こうにはユダヤ教徒のファラシャの村があるとガイドが言っていた。セミエン山岳地帯はキリスト教、イスラム教、ユダヤ教が混在しているが、争いもなく平和に暮らしていると聞いていたが、私が知る限りでもそのようである。モスレムの村はデバルクから山奥へ入るほど少なくなり、かわりにクリスチヤンの村が多くなる。さらにその奥地に取り残されたようにユダヤ教徒の村がある、という印象をもった。素人ながらエチオピアの歴史と関連づけられたら面白いだろうと思う。

自然科学、人文科学、社会科学専攻の若い研究者(体力的に)によるラスダシャン周辺の秘境地域の詳細な調査、研究を切望してやまない。

(しょうたけ・たかよし/京都大学名誉教授)